

長岡天満宮

〔開田村の西にあり。〕

由縁前編に少し違変あればこゝに再書す」当社御鎮坐のはじめは、久代此地に

弘法大師の開基し給ふ真言の精舎あり。厥后世々大師の徒弟住職して、本尊は薬師仏を安置す。又今の上羽村の辺に在

原業平卿の亭宅あり。其頃は菅丞相いまだ御幼年にましまし、業平卿御在館の時は、菅公もをりく伴給ひて此浄刹

にて御光与ましく、和歌管絃なども有しとなり。業平卿歿し給ひて後も、時々此寺に入与ありて、雪月の風光を觀じ

勝景を翫び給ふ。住僧も御幼年よりの御馴染なれば懇志を運び、浅からず饗応申されける。時に昌泰四年、菅公太宰府

に謫遷し給ふ。住僧驚き、累年の郷信なれば御余波をおしみ、淀より鶴殿のほとりに趨て、別涙数行にして袂をしぼり

ける。菅公其時みづから尊容をうつし住侶に授与し給ふ。それより三歳を歴て菅神筑紫におゐて薨御し給ふを聴伝へ、

此地に御社をいとなみ、かの神像を安置し朝暮敬礼しける。星霜累て堂宇も荒廢し侍れども、御社は嚴然たり。「薬師

仏の脇士十二神の内一体残りて、今神楽殿の傍らに安置しける」神扉は秘封にして、遷宮の時は御領主京極殿より神官

吉田家へ御頼あつて執行ひ給ふとなん。今も神威いちじるくして詣人つねに絶間なく、書画の奉納舞曲すまひなどの奉

楽ありて、社頭の賑ひ殊さら。近きとし境地の風景補色ありて、春はのどやかなる日かげに松の緑青く、梅が香一しほ

に匂ひ、つらく椿の垣根に神灯のほかげ輝き、桜花の朧々たるけしきは又さらなり。めつら鳥の卵の花におとづれ、

池の面のかいつばた蓴あやめ草、田歌諷ふ早乙女の笠白く、蟬の声の稍涼しげに鳴つれる夕暮、秋は空さへ晴れて月の

陰清く虫の音りんくとしげく、池頭の楓樹は時を得て紅葉し蜀錦の風に飄るけしき、かの光る君の花やかに出立て青

海波を舞給ふけしきも思ひ合され、あるは初雪のあしたには此御神に詣して和歌を奉るよしむかしより云伝へ侍る。都て此地は閑静にして風色の真妙他に勝れり。これなん菅神くわんじん風流を好み給ふ神慮こゝに現れ、むかしを今にかへすなるべし。